令和7年度　　園評価書

園番号　33　園名　庵原こども園

Ⅰ　経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている　B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1　教育・保育目標	2　重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
豊かな心で よく遊ぶ子	「やってみたい」を 「やってみよう」に	安心して自分の思いを言葉や姿で表現し、好きな遊びを見つけて楽しんでいる	安心できる保育者の下、自分の思いを言葉や仕草で表し伝えようとする姿が見られ、好きな遊びを見つけ、繰り返し楽しむ姿も見られが、思いが強く相手の気持ちを受け入れられない姿もある。子どもの気持ちに寄り添いながら保育者が仲立ちをしたり、子ども同士で話し合ったりしていく事で、少しずつ相手の気持ちを受け入れられる様になってきている。	B	A	・子どもたちの気持ちを肯定的に受け止め、寄り添った対応を意識してくれている ・毎日の振り返りに合わせて、季節ごとの振り返りをしていくと、より反省を教育保育に活かしていける ・研修の持ち方や情報の共有については、ICTを活用していく等、全職員で共有できる工夫をしていくと良いと思う	・子どもの思いに寄り添い、優しく声を掛けたり代弁したりする中で子どもが自分なりの言葉で気持ちを伝えたり、気持ちを切り替えができるよう一人一人に合った関わりを考えていく ・躊躇してしまう子も一歩踏み出せるような肯定的な関わりと魅力的な環境を設定をしていく ・子どもが様々な遊びを継続できるよう、興味関心に応じた環境を構成したり、遊びの拠点について話し合ったりしていく
		「やってみたい」という思いをもち、友達と興味関心を広げている	新しいことや難しいことも、保育者が時間的余裕を持って関わることで子どもが「やってみたい」という思いを持ち実践出来るようになってきた。また年長児や友達の姿を見て一緒にやってみたりと遊びに意欲的に取り組む姿が見られる様になった。「やっていたい」気持ちがあっても躊躇してしまう子には保育者が様子を見ながら関わり、気持ちに寄り添いながら一緒にやってみることで、遊びを楽しめるようにしている。	B	A		
		様々なものやことに関心をもち、試したり工夫したりしながら、経験を積み重ねている	保育者が子どもの「やってみたい」気持ちを受け止め寄り添うことで、様々なことに関心をもち考えたことを言葉にできるようになってきた。また、ポジティブな関わりや興味関心をそそるような写真掲示をしていくことで、自信を持って試したり、工夫したりできるようになってきた。	B	A		

Ⅱ　各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	子どもの発達、育ちを共通理解し、一人一人に応じた教育・保育を行っている	園内研修の中で、子どもの姿の見取りや振り返りを行ったり、保育室の室内環境を互いに見合う事で、職員間で共通理解し、子どもの発達や育ちに合わせた関わりや教材・玩具の用意ができている。更に一人一人が好きな遊びを楽しめる環境や関わりを共有し、実践していきたい。	B	B	・年上の子の様子を見たり、一緒に遊んだりできる縦割り保育は、少子化の現在兄弟のいない子もいる中で、兄弟関係を体験できる良い場だと感じる ・ICTを活用した情報の共有を工夫していくと良い ・子どもの活動の前にこれから何をするのかを伝えておく事で、子どもが安心して活動に入ることができると思う ・ただ訓練をするだけではなく、実際に体験して避難の仕方を覚えられているのはとても良い ・職員にも告知せずに行う訓練は、咄嗟の対応を学べる良い機会。小学校でも実践したい ・畑の管理も大変な作業なので、地域ボランティアを募り、お願いすることで交流にも繋がる ・生き物の成長過程を見られるのは、子どもにとって、とても良いことだと思う ・こども園のリーダーとなっている年長組の子どもたち。小学校へ入学したら、一番年下にはなるが、できることは認め自分でやれるようこども園としっかり情報共有していきたい ・節分等の園行事にストーリー性があり、子どものイメージを大切にしていることが素晴らしいと感じる	・園内研修の中で子どもの姿を職員間で共有し援助の仕方を考えていく ・月の振り返りでは、気軽に話し合いができるようグループにに分かれ各学年の育ちを報告したり、一歩踏み込んだ環境・援助の相談や共有が出来るようにしたりする ・縦割り保育の進め方について子どもが十分楽しめるよう話し合いたい
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の健康状態や生活リズムを大切にしながら、安心して園生活が送れるよう、家庭とのつながりを大切にしている	コドモンや送迎時の伝達で子どもの体調や様子を保護者と伝え合い、園での活動や食事量、午睡時間に配慮してきた。引き続き生活リズムを整えることの大切さを呼びかけながら、家庭でも安定したリズムで生活を送れるよう、働きかけていく。	A	A		・コドモンや送迎時を使い、子どもの姿や成長を保護者と共有し喜び合う ・お便りの中で生活リズムを整えることの大切さを保護者の読みやすい記事として掲載していく（例えば漫画形式にする等）
	(3)環境を通して行う教育及び保育	写真や遊び環境図を活用し、全職員で共有しながら、遊び出しの環境を構成している	遊びの拠点を作り、用具や素材の配置などを考えていった。各学年でのすり合わせや職員間での共有、写真の活用等、園庭の遊び環境図を作成し、話し合いを重ねていったことで、職員間での情報の共有がスムーズになり、職員全体で共通認識し遊び出し環境を整えられた。	B	B		・全職員が見える場所に園庭環境図を掲示し、皆で環境設定できるようにする ・タブレットを活用し、職員会議にできるだけ多くの職員が出席できるように工夫する
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	有事の際の被害状況を想定し、子どもの命を守るための避難訓練ができている	減災教育を行い訓練を重ねてきたことで災害に対する意識が変化し、避難訓練の際、子どもが自ら身を守る体勢をとったり、素早く危険が少ない場所を選んで避難したりするようになってきた。	A	A		・避難訓練時は、減災教育を念頭に置き子どもに分かりやすい声掛けを行っていく（定期的なマニュアルの読み合わせ） ・事前に職員にも告知せずに行う訓練を増やし咄嗟の対応ができるようにする
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	栽培やクッキングを通して、食への興味関心を広げ、「楽しく食べること」の大切さを園児や保護者に伝えている	子どもたちは自分達で栽培し、手間や難しさを経験したことで食べられる喜びをより感じられるようになり、苦手な野菜も食べてみようとする気持ちが芽生えてきた。食育の日に絵図やペープサートを用いて、楽しみながら食に関することを学ぶ事で興味関心を持つことができている。保育教諭が子どもたちと一緒に栽培を楽しみ、コドモンや食育に関する掲示をしていく事で食の大切さを伝えてきた。	B	A		・食育の日、食育だより、栽培、給食時間を通じて子どもや保護者が食に触れる機会を持つ（栽培に目的意識を持つ） ・複数の品種で野菜を育て食べ比べ触感、味の違い等子どもの気づきにつなげる ・企画書内に活動記録で子どもの様子を記入、保管し次年度に役立てる
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	園児の姿について情報交換を密にしたり、応用行動分析や支援方法を学んだりする中で、特性の理解を深めている	気になる子や特別な支援を必要とする子について、具体的に事例をあげて話し合ったり、応用行動分析を取り入れ、支援の仕方について職員間で話し合ったことで、子ども一人一人の姿や特性に合わせた関わり方を学び保育に活かすことができた。	B	A		・計画に沿ってケース会議や支援会議を実施し、援助の仕方を話し合い実践する ・応用行動分析や動画視聴等を取り入れ、全職員が支援を必要とする子への関わり方を知り教育保育に活かしていく
5 組織運営	(1)組織体制の充実	全職員が自ら園務分掌に責任をもち、協力しながら運営を進めている	園務分掌について、確認表を用いたり声掛けをしたりすることで、滞りなくできている。提出物が期限間際になってしまう事が多く、進捗状況の報告も不十分な事があったが、少しの時間でも顔を合わせ話し合うようにしたことで、少しずつ改善されてきている。	B	B		・会議や日々の会話又はやりとりの中で、行事の内容や自身の役割について確認し合い計画的に進める ・分掌内で細かな役割分担を決め、各自責任をもって取り組む
6 研　修	(1)研修体制の充実	「やってみたい」とする子どもの姿を見取り、保育者の関わりや環境構成について話し合い、保育に活かしている	研修方法を見直し、各学年の子どもの育ちを踏まえ「やってみたい」とする子どもの姿を見取り、研修の手立てに沿ったねらい・評価・反省について話し合うことで意識すべきことを共有しながら実践に繋げてきた。日誌の中で子どもの姿を見取ることができているか話し合う中で、日誌の記入の仕方についても検討している。	B	A		・職員同士、話しやすい雰囲気を作り活発な話し合いをする ・翌日の保育につながるよう、日誌の記入の仕方について職員間で検討していく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	各プロジェクトで園の環境を見直し、「やってみよう」につながる環境を構成している	各プロジェクトで、お互いの進捗状況を共有しながら、計画的に環境づくりができている。プロジェクト全員が揃って活動できる時間は限られるが、リーダーが中心となり、内容を伝えあったり作業を分担したりすることで、職員が協力し合い進めている。	B	B		・担当プロジェクトでリーダーを中心に短時間でも話し合いをしていき、着実に環境づくりを進めていく ・園内研修内でプロジェクトの内容について話し、連携して環境を考えていく ・プロジェクト毎の振り返りを行う
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	ICTを活用しながら、保育のねらいや園の取り組み、子どもの姿を伝え、子どもの育ちを共有している	写真を添付して、日々の子どもの様子を保護者に発信し、園での子どもの様子を共有したり、コドモンを通して保護者と子どもの様子をやり取りしたりすることができている。これからもＩＣＴを有効活用し、保護者との連携を密にしながら、子どもの育ちを保護者と一緒に支えていきたい。	A	A		・子どもの日々の姿が保護者に伝わるよう、わかりやすい言葉を使い、コドモンで配信していく ・お楽しみ会、避難訓練、食育の会等、実際に様子を見たい保護者には参観してもらうことを検討していく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	地域の小学区を身近に感じられるよう、小学校へ散歩に出掛けたり、年間を通して近隣園と交流したりして、連携を深めている	年間計画に沿って小学校と相談しながら見学や交流などを頻繁に行うことで、子どもが小学校を身近に感じられるようになってきている。原こども園とは、年長組が行き来し合いながら、年間を通じて交流を持つことが出来、子どもたちも仲良くなることが出来た。	A	A		・計画に沿って交流が持てるようにする。また交流の様子を園職員で共有すると共に保護者にも共有していく ・来年度も引き続き交流を続けていく事で子どもが小学校に親しみを持ち、スムーズに小学校生活をスタート出来るようにする
１０ 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	計画的に園外保育に出掛けたり、S型サービスや読み聞かせの会に参加したりしながら、地域の方との触れ合いを大切にしている	お楽しみ会でフラダンスや和太鼓等を地域の方に披露していただいたり、絵本の読み聞かせをしていただいたりと交流が増えた。S型デイサービス訪問の機会を増やし定期的に交流したり、JA協力の下プラム狩り、みかんの生長の観察、いもづる差し等を経験したりすることで、地域の方と触れ合うことができている。またバルーンアートの方に来ていただいたり、クリスマスには外国人の方にサンタ役をお願いする等広い場面での交流が増えている。	A	A		・地域の方々との関係を大切にし、密に連絡や連携を摂る ・散歩の日にちを決め計画的に出掛ける（合同で出かける機会も作る）